

第16回コブレンツ 国際ギター・フェスティバル

◆文・写真：テレーズ・ワシリー・サバ
Text and photographs by Thérèse Wassily Saba

◆翻訳：関塚亮司
Translation by Ryoji Sekizuka

第16回コブレンツ国際ギター・フェスティバルは2008年5月5日から12日までドイツで開かれたが、今年もチャリティー・ゴルフ大会で幕を開けた。この第2回コブレンツ・スター・ギタリスト・チャリティー・ゴルフ大会はデイヴィ

ッド・ラッセル夫妻が主宰するNGOの資金集めを目的とした催しで、快晴のもとヤコブスベルグ・ゴルフコースを使って行なわれた。約60名のギタリストが4人1組でチームをつくり18ホールを戦った。参加者はデヴィッド・ラッセル、LAGQのジョン・ディアマン、ロバート・ブライトモア、フェスティバルの総監督であるジョージ・シュミットなど。

今年は、デヴィッド・ラッセル夫人も初心者クラスに参加し、コース専属のプロゴルファーで国際的に有名なマイク・マックファーデンの指導を受け、腕をあげた。

毎晩、著名なギタリストによる素晴らしいコンサートが開かれた今年のフェスティバルは、今後長く私の記憶に残



左より、マイク・マックファーデン、デヴィッド・ラッセル、マリア・ラッセル、ジョージ・シュミット、ロバート・ブライトモア、ジョン・ディアマン



左より、ファビオ・ザノン、マーチン・ディラ、ラッセル・ポイナー、福田進一、ゾーラン・デュキッチ



プローウェル作曲〈コンチェルト・ダ・レクイエム〉世界初演
ギター：福田進一、指揮：ラスムス・バウマン、ライン州立交響楽団

るだろう。ポーランドのギタリストであるマーチン・ディラはタンスマンの〈スクリヤービンの主題による変奏曲〉とポンセの〈シユベルト讃歌：ソナタ・ロマンティカ〉を演奏した。次に演奏したイギリス人作曲家ニコラス・モウの〈追憶の音楽〉は、メンデルスゾーンの〈弦楽四重奏曲作品13番〉を主題に用いた複雑な現代音楽だが、忘れられないような名演奏だった。

アニエル・デジデリオとゾーラン・デュキッチは、それぞれがソロ演奏をした後、コンサートの終わりにデュエットでカルロ・ドメニコーニの作品を弾いた。この演奏は音色、テクスチャー、素敵なユーモアのセンスなど、音楽的

アイディアに満ちた演劇的な演奏だった。

この週のハイライトの1つは、プローウェルが作曲した武満徹への讃歌〈コンチェルト・ダ・レクイエム〉を福田進一が、ラスムス・バウマンの指揮によりライン州立交響楽団と世界初演したことである。この作品では武満とストラヴィンスキー作品を引用しているが、これは武満の世界的な活躍がストラヴィンスキーがその才能を認めたことによって始まったためである。

この週の後半には「武満徹」と題した福田進一のレクチャーが行なわれた。録音物を使用したり、ギターを使って武満作品のアイディアを説明するなど、とても興味深い講



福田進一によるレクチャー「武満徹」



フーバート・ケッペルの講演風景

演であった。

フーバート・ケッペルの講演は、ギターのレパートリーについてであったが、主としてドイツの作品を取り上げてレクチャーが行なわれた。“難局を開拓する方法”と題したワークショップは、インゴボルグ・ヘンツラー教授、ミハエル・タウエール、アンドレアス・シャーケによって行なわれたが、学生たちは、自分の長所と短所を書き出し、それを改善するためにどうすべきか指導を受けた。

ロサンゼルス・ギター・カルテットのメンバーは、4人別行動でフェスティバルに参集したが、カネンガイザーの搭乗した便が18時間遅れたため、コンサートの開始すれすれの時間に到着するというハプニングがあった。しかし、これをものともせずバッハの〈ブランデンブルグ協奏曲6番〉、リムスキイ=コルサコフの〈スペイン綺想曲〉、ブラジル音楽数曲といった対照的な作品を集めた見事な演奏だった。

マヌエル・バルエコはクアルテット・ラティノアメリカーノという弦楽四重奏団と共に演し、カルロス・グアスタビーノの編曲〈Las Presencias No.6 “Jeromita Linares”〉とピアソラの〈タンゴ・センセーションズ〉を演奏した。彼らは、現在ヨーロッパを公演旅行中で、ガブリエル・レナ・フランクが彼らのために作曲した〈インカ・ダンス〉を世界初演しており、それぞれの楽器の個性を活かした、ユニークなサウンドを作り出した。

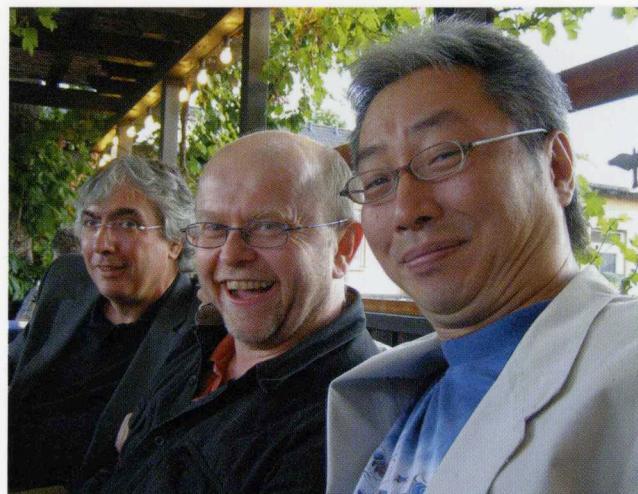
デイヴィッド・ラッセルはジャン・バスティスティ・ロイエのバロック組曲を彼の編曲で演奏した。装飾音の響きが素晴らしい、原曲の一部ではないかと錯覚させるほど見事な演奏だった。彼の音の美しさと多彩さが印象的だった。アルゼンチンの作曲家エクトール・アジャーラの〈アメリカ組曲〉はとても詩情にあふれていた。これは6楽章からなる作品で、楽章ごとにボリビアのタキラリやパラグアイのガランダといったラテンアメリカのいくつかのリズムが使われている。

パヴェル・シュタイドルの演奏も忘れることができない経験だった。バロック時代のチェコの作曲家たちの初期の作品を多く演奏したが、彼独自の解釈が際立っていた演奏の1つはカルロ・ドメニコーニの〈ジミ・ヘンドリックス讃歌〉だった。

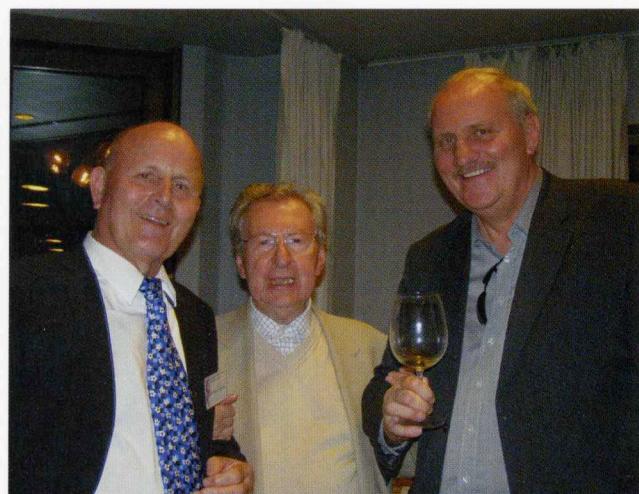
今年のコブレンツ・フェスティバルには“若手芸術家によるコンサート”と銘打った新しいコンサートシリーズが加えられた。1人の演奏時間は短かったけれども、演奏の質は非常に高度なものだった。モンテネグロ出身のゴラン・クリヴィオカピク Goran Krivokapicが、バッハの〈無伴奏パルティータ第1番 BWV1002〉を演奏したが、各楽章に付くドゥーブルはさらに音が多いにもかかわらず、彼の指の速さは2倍（ダブル）ならぬ4倍（クオードブル）と言うにふさわしかった。マグダレナ・カルチェヴァ Magdalena Kaltchevaの演奏はダイナミックであった。ロシア出身のウラジミール・ゴルバッハ Vladimir Gorbach



マヌエル・バルエコとコンラート・ラゴスニック



左奥より、ジョージ・シュミット、パヴェル・シュタイドル、福田進一



左より、クラウス・ハイネン博士、コンラート・ラゴスニック、アルフレッド・エイコルト



コンクール第2位受賞者（第1位、第3位は該当者なし）
アナトリー・イゾトフ Anatoly Izotov (ロシア)、パク・キュヒ Kyu-Hee Park (韓国)



長い音楽祭を終えてくつろぐ学生たち



ライン・モーゼル・ホール

はアンコールでゴラン・クリヴォカピクと舞台を共にした。出身国が異なる2人ながら、まるで兄弟かと錯覚させるほど、見た目にも、技術的にも、そして最も重要な音楽的にも似ていた。

コブレンツ国際ギターコンクール“フーバート・ケッペル2008年”のファイナリストは、パク・キュヒ Kyu-Hee Park (韓国)、アナトリー・イゾトフ Anatoly Izotov (ロシア)、アルチョウ・デルヴォー Artyoum Dervoed (ロシア)、エドゥアルド・コスタ Eduardo Costa (ブラジル)、ジュスク・リー Jusuk Lee (韓国)、アンタル・プツタイ Antal Pusztai (ハンガリー) であった。

今年のコンクールの参加者のレベルは、これまでと比較してあまり印象的ではなかった。その結果第1位と第3位は該当者がなく、第2位に韓国のパク・キュヒとロシアのアナトリー・イゾトフの2人が選ばれた。審査委員長はアルフレッド・エイコルト、審査員はコンラート・ラゴスニック、ロバート・ライトモア、ジョン・ディアマン、アレキサンダー＝セルゲイ・ラミレス、ギュンター・シリング、スティーブ・ザチャック、ジョセフ・ウルシャルミ、テレーズ・ワシリー・サバであった。

フェスティバルの期間中、コブレンツ国際ギターアカデミーの大学院に学ぶ学生による卒業リサイタルが行なわれた。今年は、トルコのギタリスト、オザン・サリテペ Ozan Saritepeがロドリーゴの〈アランフェス協奏曲〉をライン州立交響楽団と演奏し、審査を受けた。

詳しく書くスペースがなくなってきたが、アルヴァロ・ピエッリがヴィラ＝ロボスの〈ギター協奏曲〉とポンセの〈南の協奏曲〉をライン州立交響楽団と演奏、デイル・カヴァナーがソロ・リサイタル、ピアニストのシェイラ・アーノルドがギタリストのアレキサンダー＝セルゲイ・ラミレスとデュオを演奏した。非常に鼓舞される1週間であり、会場の素晴らしさも印象的だった。フェスティバルが行なわれたライン・モーゼル・ホールは、風光明媚なライン河を望める川岸に位置していた。

日曜日の夕刻はホショ・ステファン・カルテット Joscho Stephan Quartettによるジプシー・スイング・コンサートが、リズム・ギターを担当する父親も参加して行なわれた。彼は、優れたテクニックと音楽性に富んだ非常に印象に残る若手の演奏家である。

来年、第17回コブレンツ国際ギター・フェスティバル兼アカデミーは2009年5月25日から6月1日の日程で、これまで通りクラシック・ギターにおける世界のトップレベルの演奏家を集めて行なわれる。